稽古隨筆 全

1曾5
640

門 1曾5
號 140
卷

昭和十九年十月廿九日

枕草子

不言菴

稽古道草叙

古は往ゆく方すてそよう前るまぎれちらしもの
ことを皆くふーへなぶるなし事に物よみ
書かくことを好みて後古のものを物まねする
て古人の草まねにおもむきそるおよまたに何をも
又のちのちたよりて物源のほに一再なすら頃
人を愛するかしはまると
こそこうかむのしるし人のをはすこの物を残草に
見せて書ものしおのをしつるものるこよなを
かとなを世て那をもそなれて生ものをあこと
ふ根ひもすて古人のこををぬぎて古人のめ
見やもるる物をおもるしたのもも

志く画のうず
さればこそ今より後此ふみを見ん人も都て
なほこれを見んとする時のたよりともなるべし
とするの心を記して叙するものは不言庵
主物愚の迷語こそとせあまりよわひのとし
はなしなりのやうかといふめり深更の燈
草卑のことゝす

一 昔しから手ぐすねひいて待つといふ言葉ある事に物するに臨むで一層努力なさむといふ所に用ゐることとし此ことばの起りを案ずるに弓の法の矢筈に加ふる心の摺れ傷みたる所に松脂を主として造れる「クス子」といふものありてこれを手に引きて弦の傷を防ぐ法ある事これある所に「クス子」引きて待つといふむまそ手ぐすねひく しと言始めたるなるべし又平家物語にも見ゆる矢の根に鼻脂引てといふこゝと同しこゝろなるべし

くすね（薬煉）鼓緑黏とも書く　松脂を油を交ぜて煮たるもの

一 左甚五郎の事蹟

讃州高松藩松平讃岐守の木具師木具屋和六の男なり

左は其苗裔なり 漆物を作る 仕事丁寧にして 甚逸
群踏襲まらす 諸国より遺作ある所以なり 甚五郎五世の孫
赤代造は八代目地に住し 左を姓とす 墓碑の墓は
京 松寺町 地蔵寺と 築地町 一浄院とあり
昔飛騨国々山百姓 飛騨の地にて貢租とする為き産物な
依て匠人を出し貢租を充てるまし 延享弐年見ゆれより
飛騨の匠の名伝はりしと
今昔物語 宇治大納言 飛騨の匠といふ微妙の細工人ありと
記せしより世に工匠の巧みなるものは 飛騨の匠なるが如く
いひなるまでなり 飛騨と左の国名近きより 甚五郎
附会し甚しきは 左を印して 左利なりと誤るなどいと
かまもなきものなり

一 青簾の事 俳諧題 青葉の簾 又翡翠簾なとゝ云ふ

此青簾を四月朔日加茂の葵と倶に禁中に掛らるゝ

已住六住色こきませよまきすたれ 岩雪

此句先を思のたし給へ

青簾 蓼太

此句の意そも如何 今このまみ見れを新よ第れ
るを第一或る料理店なとにて句作
まるゝ小吹の句なとにあるあり 誤りと亦赤し

一 手柄岡持 狂歌師

爺々姓 玉沢名は常富 通称平角 享保二年国三月廿日
生れ 文化十癸酉五月廿日病て歿す 行年七十九 深川浄乙

寺に墓あり出羽秋田の侍と佐竹右京太夫の留守居役たり仕を辭し薙髮して平右と改む初め戯號を洒落袁成ともいひ後は月桂居士と言ふ寛に明滅也、天壽、月成、亀山人、韓長齢の數號あり明和天明の交專ら稗史を綴り戯號を喜三二と言ふ著す所の書 寄慢齋行脚日記、吉原饅頭萬八傳、天道大福帳、古朽木、運開扇子花なと世に行る就中文武二道萬石篇は最も傑作の名あり 寄三二の名は門人市阿弥三郎兵衛にゆるす 市人亦号芍茶亭長根と呼て狂奇の利名となれり 辭世の歌 死なんて死ぬるものとは思へども お歳まはの御名をなとと人や言ふらん 狂奇よむもちは月桂居士の居持よ 涙まぬだんでは月桂のおたまち

一

鶴屋南北 狂言作者 四代目

江戸濱町に住る幼名を源蔵といひ後伊助と改む父は組屋乃形付職なり

安永四年金井三笑の門に入り勝俵藤と呼ひ始めて演劇の著作をなす 享和中道化形にて有名なる三世鶴屋南北の女を娶りまする四世鶴屋南北なり 同人作中の最も著名なるものは お染久松色読賣、隅田川花御所染、四谷怪談 とす世に南北物と持囃せり 文政十二年十一月廿七日年七十五にて卒す 所押上村春慶寺に葬る

死期迫るの日弟に遺言して曰く我は一大事因縁ある枕頭なる抽屜の中に納む死後抽き見よと 云れを見るに 死出門松後万歳と題し万年の四韻に擬して葬送万詠

の事を書けるなりと子爵唖然これを滑稽の仕種なと為せ
ば十返舎一九が遠方より書き換しの反古をまた売きたり
我と共に莨盆の煙りとして後の離を断てと言ふ反古と称する
ものを頭脳震に納めて空葬せしに火の移りと共に爆出せ
しは菊花火と称する玩物にて会葬者を驚かせし
物語りと好一對

菊水 邸宅なる折りし時近鄰の家火を失す家も又焼られぬ
お人妻桶に水を満り妻柄杓を持て水を撒た臭紛紛
菊水解易すは流しを少て七代目團十郎 狂奇を賜る
鼻もちもなら及肥しを宵入りて今身為る作の出来秋
菊水 吉之丞に拘泥せず西年を作る事ら俳優に面すを
以て見れりとす 待といふに濁点を打て先の烟を旗と誤る

きるの歌これなり

一簡約なる文章

子曰辭通而已と文章もまた須のらく習なるべく冗長よし
て達せざるは拙の極なり
昔漢人船中にて病を発し長安の官府医を求むる文に
急病請醫 の四字を認めありしと
又歐陽子が五代史を修せる時偶門外繋く所の馬奔逸し
て犬を踏み殺すを聞きて
臥犬死奔馬下と記したるが如き
又平家物語に大将と見れば続く兵をなく士卒かと見れば
錦の直垂を着けたり 文を山縣園南が譯して

将服無従者

徳川の臣本多作左衛門家に寄せる文

一筆啓上火の用心おさん泣のすゑ馬肥せ

箱根権現の什物北条時宗の文

昨夜隣火忽消貴寺安穏珍重候

清元延壽太夫の家へ使ふ十五六歳のわらべ或時祇より

一封の文を遺す延寿拉ふて拵きたれ弟子娘に寄

する艶なるしがすゑ久し四

覽

一わたしゆお前にほれたいやならいやとすべくれ

一五世川柳狂歌句の家元 徐亭と称す面称金兎 佃島に住す 天保十三年

三月二日南町奉行より褒賞を受く其褒状の文

佃島勘十郎地借

金藏

其方儀父は先年相果母ゆき儀其方を召連た平次方へ嫁し

居り困窮のところ其方成長の上心掛よろ〳〵方事父母に

存亡に背かす家業さらに出精怠しいゆゑ近隣見上取直

しいの聊の奢侈のふるまひなく相怠り養父病死後

母義眼病にて盲目よりあらは別して孝養をあつし日々高

いより之度りの節母の好みの食物買とのい参りて喰せ

又は慰もし相なるべき咄しを致し慰い因

人病死の節も厚く介抱いたし今以て絶えず佛参致し

其の上去る午年以来米價高直の節も近辺困窮の者共

度々来演ありしが名聞を厭い夜中密に差送しは偏に
有るべく一件生質書籍を好み元来孝悌のこころ追々自得
に書籍を家業の渉まて近辺の者を呼び集め忠孝仁義
の道を講読教諭いたし善道へ導びきい陸奥者ハ
奇特の致す有右の趣きを上げ御褒美として銀三枚取り遣
ぶはすもの也
天保十三壬寅三月十日

其時の狂歌の句

すき者の言葉を達し言葉掛りて
成る程なるほどと伏す川柳　五四　川柳
高野の南時雨の花の早咲き　月番左仲は土井大
炊頭利則なり

一滑稽小説家梅亭金鶴翁年七十二　天保十年六月二十日谷中の宮仕る辛酉　近世の滑稽作者の巨擘なり

一太田南畝の壁書　太田覃字子耜通称直次郎後七左衛門と改む　文政六年四月四日病み罹り六月死す七十五

戯名　四方赤人　赤良　蜀山人　四方山人　遠櫻山人　竹羅山人
杏花園　石楠齋　寐惚子

其名字は毛詩の大田篇に以我覃耜俶載南畝とあるを採る

南畝ものを乞ふもの多きに苦みたの書を為す
年頃わが書を請ふもの多し所子園扇　腰紗　唐紙　和紙
我いやが利欲の胴衣ものを乞ふもの累々として果しなん利欲
吾れ主張ふものくうきにより上中下の品を定む上

は速かに書へし中は預り置て書べし下まきては書べか
ら所若し少のずして預けおく者あらば扇と扇の食む
を但世紙を反古堆中に沉て永劫浮ぶ瀬なからんべし

上の部

一詩歌の心をも雖へたる人
一詩歌のみはたらねども歌を信して賜く人
一名人の恵贈
一表裝をして義を掛まとする人
一玉つて義人の血頼み中くらるるとは不覺知すり又頼み
をそは更とらず

中の部

一詩歌の好みなく何をもよろまといふ人

一人こ者ともなく自おきあるくといふ人
一扇二三本短冊二三枚反紙一二枚好む人

下の部

一悪恵悪紙和反紙を雖へざる人
一遠國に近く旅をつ人に賜るといふ人
一小看の價高けれども扇よかへせて者るが徳用といふ人
一何の一向わるらねども書せて置くぶ徒と心得て むせ
に書かせる人
一筋遠御門外の古道具屋山下あたりに居る人
はかいやなる事だらけ其日もるさき交しあた
ら光陰を費やして愚作者の眼を悅ばし むるにより
びず仍願書如件

南欧和尚ハ生まれ前々日四月心地悪敷ふと飲酒を
とめ肴魚の煮て茶漬飯を食ひ一詩を賦す
辭世将爰死、七十五居諸、有酒市脯近、盤飧比目魚、
辭世の歌
ほとゝぎすなくやかなみ初松魚春を長よの入相の滝
小石川原町本然寺ニ葬る法諡 杏花園心逸日休居士

一 大老田沼主殿頭

天明時代の大老職ニて子息山城守ハ若年寄ニ任せられ親
子の威勢ハ花々敷ニて居ニて抜扈将軍も意なりに
当時の童謡ニ
田沼様まて有いもないが世あて成たい公方様

以て金銀を散ぜし息山城守ハ天明四年三月廿四日柳
営中ニて御番士佐野善左衛門ニ害せらる当時高貴に
山城の自の如神血を流して赤年寄と人ニ云ふなり

又

此度百年目の開帳、害帳せさせるふぼん尊ハ山城国
氏多郡成ヶ村非常山金休院金仏世界の凡尊天命築
地蔵、因沼大師の御作、世上一流さんゝの御沙汰、世ごこえ
なる御利徳いらたかき、二ヶ所のたゝ刀疵ハ、世上見せしめのた
めに、誠に現まあたじけなき世の人の知れる所なり、一度も
信せさる非ハ武運長久、悪事災難を免れず、又誠ひ信
する非ハ、人ゝ生まれて仕立身させ、来世ハ金閻地獄ハ落さ
人ゝの御誓言なり

一明治二年七月東京御遷都當時の物價

米壱両弐分二斗五升　酒壱升弐朱十二銭五厘より

其頃は駿河亀者町辺は皆桑茶植付場なりし是は官府の奬励より明き地畑地桑を植付させたるなり

一人力車は明治三年みちより出来たり当時人力車の造り方は皆家根を一見車の市に宮町の高ふ荒神橋と称する神橋なるを付け多くは中程に横形の形を拵へ左右に屏風を付けたるもあり夫より後毎布付きの三輪車左右とも皆黒漆塗にて出来漸次改造なりしが皆後に種々の武者絵なとを漆塗まとき今新嘉坡抔に輸出するものとはなし作りかたなりし最初は陸軍実用に使用するのみ去来

面白いなとに奇を好むものが用ゆるようになり人力車と見物山を為し家の中を通きぬれ者せしる成るあり

一紙屋通りの炭化屋通りは明治四五年頃出来横町珠に八百屋の垣根なりは為るの住む人なし

一明治五年十月人身売買を禁せられ遊妓楼の抱遊女論議者的人が一時親元又は其親族に戻すべき旨布告なり法前の身の代金は相場を以て不足の分は其まま遊女屋に義務なる所大慌てこれを解放と唱へ大騒

動なりし是より女郎屋を貸座敷遊女を出かせぎ娼妓と
名称を改まりしなり

一新聞紙といふもの初めは主として官報の抄録と漢訳小
説刑法の新律と幕府の一平成和とて中外新報といふもの
出来しも岸田吟香氏なりしが幕府を思ひ之を後日日新聞は
大阪町に幕府の派生役人辻傳四郎が年来所々の小説稗
史野話を採りて伝聞といふ業を始めたりしが之を改め
後日の新聞社となし主筆は例の岸田吟香氏假名垣魯文
條野傳平なりて京創業に多年従事して辻氏の僕従
高畠藍泉を他国傳聞なども働きたりし明治五年頃に英
国人獺刺底(ラッフル)が派生罪囚の角(ラッフル)新聞を始め後日本
人のみに移りて日新真事誌と改称し報知新聞は横山町
三丁目新聞屋の新聞といふ書肆ありて此頃新聞を編輯
する移転家に充て一ヶ月僅に拡張に至らず遂に本版切なりし活字の行はれたるも
よりも後なり

一言論の自由　明治二年頃より同四年頃まで市中群集の辻々
上書箱といふものを置くも改事を分何事にても書面をもて
忌憚なく投ずることを免されたりしが後に至りて
過激なる建白書なども有りしなり

一靖国神社　招魂社と明治二年建築に起立し同四年より

故功しを奏し大祭を挙なりしと云ふ

一鑾輿組織は神奈川県典事野村維章男爵は清国上海に出張して調査の上明治二年に神奈川県に敷設したるが初めて当時の居留地廻りと唱へ三人相乗の輦を持ちて巡羅したりし夫迄は吾国兵上陸して吾国を警備せしに東京に布告ありて明治四年の冬より薩藩が更持ち川路広之進後利良坂元純熙安藤則命が東京を三区に分けて管轄しこの巡査は最初は邏卒といひて紺羅紗の背廣服に車夫の用ゆるやうな鍔無帽を二対より三人持ちたりしが後巡邏と改称して並山笠(江川太郎左衛門の笠)の形を紙撚り裝漆塗りを冠りたり

一権利といふ熟字は西洋の翻訳なれば新に作りたる文字なるやうに思ふ人あるべきれど三千年も前の支那では荀子といふ本に地熟字が使ひてあり又頼山陽の通鑑に一國者有一國之権利といふ詰が有る

一武蔵相模の古名○武蔵は牟狭志毛(ムサシモ)○相模は牟狭加美(ムサカミ)て亟東は縮て上下(加美志毛)を以て国を割けあり奈良朝時代より武蔵相模の字を用ひたりと唱へ居りまして誤りまして書きしさかしきとなりし由語意といふ書に見えたり

一自由民権説は明治七年の春前年征韓論の御変より破れ
離れたる前参議副島種臣板垣退助の
三伯爵が民選議院設立の建白より始まりて
此建白書は人心を動かすの力多く有名
なりしなり

一演説会は明治七年福沢諭吉氏が西洋事情を
初めとして世に出でしより遂に政府攻撃の
事多くなりしが明治十四年時の法制局長官渡辺洪基が
立案して集会條例を出せり

一木村芥舟翁逝く 明治三十四年十二月九日
七十二才

氏は安政六年幕府の軍艦咸臨丸遠洋航海の提督
として始めて米国に渡航したる人なり当時の従者は勝麟
太郎 海舟 小野友五郎 福澤諭吉なり

一食堂列車は明治三十四年十二月十五日官設東海道線川
車より実施 築地精養軒料理員人なりとぞ

一兆民中江篤介翁逝く 明治三十四年十二月十三日
氏は土佐高知の人 病床に在て一年百日といふ書を著
はす書肆博文館より版し傳るべしと数万金を投ずと氏
書の序に於て喧しく

一 蜀山人有名の狂歌

心をも身をも深くこめぬれば 矢伸の沙の枝の文字乱

一 西山宗因名は豊一通称は二郎作 梅翁、梅也翁、西翁 西宗尾 有芳酒井の数編あり
寛永以降の人肥後八代の侍なりか後西方に仕え文武のほまれ有
し寛永九年三月滅せし法人にて京都にもて西保に
年社法を移りなり知音は豪信という法印に連歌は里村
昌琢に学ぶ後に俳諧の読林の一派を興せり句
詠もとて花もいたし歌の骨
花は雪月は法印が眺もて花もいたく刷毛ぬれば散る
わのもとにて知しかりなれの雪をもはしたるもの

一 加賀の千代女は安永四年九月八日寿年七十四にて御国金
沢に歿す墓園尼と呼ふ 法名表具院六兵衛の女
遺歌は金沢の寺に有る墓碑の句
月もうて我はは世をのしくるなり

一 辰巳藝者の豪奢 深川仲町の藝者にて時めける何某と云
ふあり高き木履のまけりを雪の角天の蒔絵にして珊瑚珠を
ちりばめ鼻緒の後ろに小さき抽斗を設けて手巾に白い袋
と云ふ袖二寸の服紗を入れおき揚屋に入りて付附添ひの
小女に服紗を出して塵を拭い白い袋にて下駄の表と
はを結ぶことを打叩きて手巾を移しなりとは行くこと町
を門に出でて手巾を用ゆ抱えて若干の料料を受

せられしと妖女の名を逸したるは殆惜し

一「リパブリカン、マリエール」といふを佛蘭西國大改革命の時男女の罪人を一括して水中に投げ入れたる刑の名なり後晋の高祖紀に水獄といふあり水中へ蛇を放ちて罪人を入れたるなり

一婚を求むる男子先婦人容色を問ふ ボルテイモーア 財産を問ふ 紐育 家柄を問ふ 費府 教育を問ふ ボストン 而して我邦人は遠く兼備せるを問ふ

一孔子の像は皆髯を蓄ふ皆深ければ孔夫子は髯なし

とふと孔叢子に曰へり

一清國の偉人李鴻章は明治三年四年十月七日鴆を服して斃る在官三十年一年七十有九

安徽省合肥縣産 起徽賊長髮賊之亂 從將軍曾國藩 戡定奏偉勲 陞北洋通商大臣直隷總督 文華殿大學士 太子太傅 一等肅毅伯

一明治三年五年初春の彩曲として日本橋の花柳界にて作る多

小唄は

斷雪月花

「ふるえちし曙のやいもせづけき御代の栄花と白らも魁の梅は桜は

（駒吉作 坂井紫香 初代川柳 永井荷風）

諸国を雪を降らせて月もんこつの糸をぞ国毎受けれ

ヨイ〳〵ヨイ〳〵ヨイ〳〵ヨイトヤサ

賛東の四季

「明けて二月の春風に初花の頼母敷張ふて集ふ上野や
湯島堀わけて一夢初かつを月のみさきや枝と共に飽か
ぬ隅井の夕紅葉ヨイ〳〵ヨイ〳〵ヨイトヤサ

物の云近比小唄なる作るまるまるの文々のかき俗物のまるまるの多く作者出来岳なれも勿論文壇入るべき
徒なるねぞ論出るまでもなきうるなるから東の四季いふ
歌なるまるまる作る角まるまるの出るまるのみいふ
てみるるに及はす章句の巧拙ともれかくまれ歌
趣まるたるふ奇作なるは作者の志し

おなし〳〵落町の粋也

新年梅

山人の住める蓬莱の島山に春こあてぞ明そもる彼の浦曙
あとたれて齢を祝ふ千代草「竹の園生も豆から及雪井よ
白ふこのとしの歌の御題をひなぶりに稲ーて見るやよし
町の唄る旅ふる春の色「品と梅子をとりぐに数へかぞふる
手鞠唄うけて流せてはら〳〵と野梅山毒咲初めし初
花夜一主八主「人とは昔の思ふく深く心あしの雪後
梅こがれて行舟の流さなめぬ浮梅やヤこ秋から〳〵
うるもの面影なつかしくほのぼのに見ゆる朝の梅「実に
魁の花の兄梅の世となるまそめたし

一 先年清國義和團亂の蜂起より延て同盟有力なる親
王端郡王及び國母西太后が團匪に同情を寄せ各国の
使臣殺害を襲撃し使臣を殺害し或は孔廟を焼き
なるに各国軍に下令し北京を陥れ
太后共に西奎せらるに至り同盟軍明堂の義を容
れ各国に代償し我邦義勇獨逸の使臣の殺害
過たるを以て特に使臣を送り今和議成て
各国会せて計金数億兩の償金を出すことなる
うせしが同盟者有て無条件償金支
出額を少額に在り京軍額を使なる
清国を援助なりしへ宛も出しなる分擔額は左の如く
なりたるを以て支那者有の財産の多寡を知

る得へき為に記し置き以

四川 二百二十萬兩　江蘇 二百五十万兩
浙江 一百四十万兩　廣東 二百万兩
湖北 一百二十万兩　江西 一万四十万兩
山東 九十万兩　安徽 一百万兩
山西 九十万兩　河南 九十万兩
直隸 八十万兩　福建 八十万兩
陝西 六十万兩　湖南 九十万兩
甘肅 三十万兩　新疆 四十万兩
雲南 三十万兩　廣西 三十万兩
貴州 二十万兩

通計壹千八百八十万兩

一嘉永六年六月米國水師提督ペルリ軍艦に乗込み浦賀
條約を求めたり桐州久里濱に来り幕府要求せ
所あり当時幕府其事を諸藩に命じ武蔵を守り海岸
要所ごとに警備を固せしむ
一江州彦根城主井伊掃部頭こゝに六千八人
桐州上宮田を固め
一武州川越城主松平大和守五百人
同三浦郡三崎を固め
一奥州会津城主松平肥後守千四百八十六人兵船百
挺一艘
上総富津を固め
一武州忍城主松平下総守五百人兵船四挺

房州竹ヶ岡を固め（以上を四家の固免と称して世々名ゝ引し田）
一浦賀奉行戸田伊豆守の本家戸田采女正百八十人
久里濱附近を固め
一細川越中守　本牧
一毛利大膳大夫　大森
一松平越前守　品川御殿山
一立花左近將監　深川
一松平阿波守　佃島
一松平讃岐守　芝濱御殿
一大久保加賀守（十四原）水師出役守（池田）莊山代官　江川太郎
左衛門　石ヶ谷陣ヶを固む

一 明治元年の春頃新吉原の遊女中等家屋の多人家四
五千億千他の多数起人となりけの改付く称して今の東
橋の北新町芸者の辺附近に仲に新遊廓を開き新
島原と称す等地の新開地橋際の河岸を出て近
て大繁昌を極めたりしが僅に五年を経て明治三年
の大火災函館の全市で西南の一隅
にさゞ出たるが此時の風位は東南の強風なりし故
自然に焼延りて家屋を焼尽し十倍の勢を
なり今日に至る迄去らずと嘆かはし

一 明治二年北海道に開拓使を置き札幌時の参議黒田清
隆長官たり後に分県制を施き文会して北海道の治下

に於ては屯田制は師団制を改めて極北の国防に充つ

一 繪はがきといふものは既に流行し日本にも明治
三年三月頃より初まりて近年に至り
し新聞紙を漸したるものの如きなり近来郵
便局の賜金たはがき郵便を使用すること
流行せしが郵便税の率上げこのわく物騒りしが
此程たゝの重はがきを廃止して新郵便
便安く高額なれば新郵便をなるべん

一 明治三十五年一月二日清国奇勝の金貴角全世の起
土地、星春浪怒 北海紅葉会話出句たに

[illegible]

一今年は壬寅　支那にて寅年を攝提格といふて珍重せり
支那にて寅の異名を付せる
陳魏の間　李父といひ　江淮の間　李耳といひ
楚人は　於菟といひ　南人は　猫といひ
関西は　伯都といふ其他　山君、虞吏、庚寅、
英獸、寅客、班奴等なり

一蜀山人が京都の國學者加藤雪齋に初蜀酒の歌
數首の返に遠方と少くからは三四の矢を家つす惜から

一日人の自尺の歌に
詩々五山書は若尾に狂奇已れ藝者小萬に桂記八玉善
日〳〵
詩々五山書は鴉奇に狂奇おれ藝者はお松桂記八玉善

一印度の十二支　大集經よあり
毒蛇、馬、羊、猫猴、鷄、犬、猪、鼠、牛、獅子、兎、龍、
土耳其の十二支
鼠、犢、豹、兎、鰐、蛇、馬、羊、猿、鷄、狗、猪、

一理學博士伊藤圭介翁　無果花　山吹に実あり　[illegible]

昭和四年　高齢九十九歳にて卒す同翁の碑は福寿延長之碑と題して名古屋裏門前町光勝院境内に建つ新年早々除幕式を行はれし碑表は翁自筆の梅月自題の詩にて当年宮中の歌題に符合せしも間あたし翁の詩は

朦朧梅与月、暮露淡籠香、一枝香風家、満渓鶴喚人、　九十九齢寓老人鶴俳題

一日本の文明と湯屋　と題して米国のエキサミナ新聞に載せたる所を見るに抑も文明が彼等の鎖国野蛮的生活を捨てしめしは近年のことなるに斯くは文明国と優劣を競ひ五十余年前に蔑視せる文明国民の多数をして後に瞠若たらしむるに到れるなり夫れ日本人の優れる理由は数多あるべきも其理由の一は日本の湯屋統計を見ば知り得可し湯屋は如何なる市邑にも存在し東京のみにても八百の多きに上り入浴者は毎日二千万の平均にて年長者は一仙小児は半額の入浴代を払ふと云ふ清潔なる国民は勇気ありその市民の健康なる身体には健全なる精神を宿るべし我大なる米国都市は数年前の蛮人まで今は成長速き日本より学ぶ所あるべしと云々　又曰我等は日本より決して小児を殴打せずと賞賛し且つ岩山壽男のマクスミュラー文庫寄附に付き記する所あり終りに「身体には浴湯、頭脳には書籍、小児には親切なる手扱ひ」こそ近代日本の段取は

是なり進達せざら人と欲すると得ずと論ぜり

一新年小笠原流の喰積み　白木の三方四隅に紙立（かなたて）（甲立又乃立とも）
（紙立の仕方は紅白の奉書紙を重ねるなり）
真に松一本（貌三尺但し）かさは大根を大切にしてこれに挿す　白米一升若干の玄二升を杉なりに盛り橙に海老を這上らせる仕方は海老の背より串を橙まで通し橙より海老の背に水引を分け水引の結び先きは上へ向く　其前に柑子、柿、田作り、荒布、昆布、ほだはら、左右に菖蒲、杜葉、里芋、梅干、野老、後方に熨斗あるべしよりぼたに橙もいでし

一樹々に氷の花咲く　明治三十五年一月十五日の夜より寒氣はきびしくて去る十七日の夜より少日に雲なく文て和暖からず晴天なり此日れを見はいつの頃の木々枝となく氷品の如く玉を義くしきいはひかふし如何にまて消えやらず枝葉かせのいたつきたる卧しがゆゑならまかは是高上中下とんあまきたる仕方宋しのらあとはおのづと思ひぬ沼ゆゑ仕濃のもとは自然あらずも水玉の点点に結ひ付たる様なるものなるべし
まことの花ともいつくしし

て
全紙
下白
以